

平成州紙



おりおりの記

ゆとり教育に思う

公益財団法人 新国立劇場運営財団
理事長

福地 茂雄

「ゆとり教育」なんと耳触りの良い言葉なのだろう。

小学校、中学校、高校、有名大学、大企業とそれぞれの狭き門を狙っての入学試験、入社試験の合格率を競い合った反動として、本来の教育、つまり教えるべき時期に教えるべき内容を忘れ、事もあるうに小学生にまで「時間のゆとり教育」の特権を与えてしまった。

私の毎日の通勤の道すがら台東区稲荷町の交差点に某仏具店の大きな看板が掲出されている。その文言に「心は形を求め、形は心をすすめる」と書かれている。確かに私たち日本人は、物事の形を作ることは長けているが、その形に心を込めることを忘れてはいないだろうか。「ゆとり教育」こそ、その最たるものと思う。

最近、土曜日の授業の再開に関するアンケートに対し80%以上の保護者たちが賛意を表している記事があった。子をもつ親にして、蓋し当然のことと思う。にも拘わらず、何故、是正・修正されないのだろうか。

理由のひとつに教員数の不足が上げられている。ならば教員数を増やせば良い。雇用の創出・促進は何も民間だけに求めるものではない。土曜日の授業を本来の「ゆとり教育」として土曜日専任の高齢者教員の雇用創出の場とすれば良い。団塊の世代が高齢者に達し、働き盛りの高齢者は増加の一途を辿っているのだ。

別の見方で、「ゆとり教育」は「詰め込み教育」を避けるためとも言える。

「詰め込み教育」は間違っているのだろうか。

小学校時代は最も暗記能力の高い時期だと思う。そのひとつが漢字だ。漢字は理解して覚えるものではなく、暗記で身につくものだ。私は小学生時代に暗記

した歴代天皇のお名前や、小学生時代に詠んだ短歌・俳句の類、はたまた在校生総代としての卒業生への送辞、小学校時代の四人の恩師のお名前は今日でも明確に記憶している。一方、昨日の夕食のメニューは忘れてしまっている。

「企業は人なり、いわんや国家は人なり」ということに反対する人は誰もいない。そして喫緊の課題は教育であり、国家百年の大計も教育に在ることに反対する人もいないはずだ。しかし、時の政治家は改正の必要性を叫んでも手を付けようとはしない。その理由のひとつとして、教育問題を手がけるには内閣が余りにも短命なことが挙げられる。

かつては、教育大国として地位の高かった我が国は、ずるずると近隣諸国にその席を譲っている。「ゆとり教育」改革は今すぐに手を付けなければならない。「明日では遅すぎる」。

